

「渋沢栄一」と深谷市

篠崎 辰夫

「渋沢栄一」が新紙幣の一万円札の肖像に決まり、今地元の深谷市は渋沢フィーバーに沸いている。市ではもうずっと前から「渋沢栄一翁を紙幣にしよう」運動に取り組んできており、渋沢栄一を描いた架空の10万円札を作るなどしてPRしてきた。このような長年の地道な運動が実り喜びもひとしおのようだ。<下はそのPR用10万円札>



ところで、「渋沢栄一」はどんな人？と問われても、答えに窮する。テレビのレポーターが街で知っているかどうか聞いていたが、若者を中心に知らないという人が多く一般には意外と知名度が低い。たしかに一言では言い表せないくらいすごい人なのだ。「日本資本主義の父」などと言われるが、これではさっぱりわからない。

そこで「渋沢栄一」の経歴を、上のPR用10万円札の裏面から抜粋した。

天保11年(1840)武蔵国榛沢郡血洗島(ちあらいじま)村(現在の深谷市血洗島)の農家に生まれる。24歳の頃、徳川幕藩体制に疑問を抱き、尊皇攘夷運動に加わるが、その後、一橋家及び幕府に仕え、慶応3年(1867)渡欧。約1年滞在する中で、ヨーロッパの進んだ思想・文化・社会などを目の当たりにし大きな影響を受ける。明治元年(1868)に帰国した後、大隈重信の説得により、明治新政府の大蔵省に仕え、財政の整備に当たるが、大久保利通らと財政運営で意見が合わず辞職。以降は、一般社会で実業界の最高指導者として活躍。各種産業の育成と多くの近代企業の確立に努め、第一国立銀行の創立を始め。設立に関わった企業は、500余りに及ぶ。また、社会公共事業にも熱心で、東京市養育院の設立をきっかけに、数多くの病院や学校づくりに尽力するなど、600以上の社会公共事業に関わる。国際親善にも寄与し、世界の人々と幅広く交流した。さらに、都市づくりにも情熱を燃やし、栄一翁が深谷市に設立した日本最初の大規模機械式レンガ工場で生産されたレンガにより、東京駅、日本銀行、旧法務省など、明治・大正の時代を代表する建造物が数多く建設された。

補足すると、設立した会社は、まず第一国立銀行(現:みずほフィナンシャルグループ)。日本初の「銀行」を作った。従って紙幣の肖像画には最もふさわしいといえる。「私利を追わず公益を図る」考えで自身の渋沢財閥を作らず、その時代に必要とされているモノ・サービスを社会に提供すべく、次から次へと起業していった。「日本資本主義の父」と言われる所以だ。

王子製紙、帝国ホテル、東京証券取引所、東京急行電鉄、麒麟ビール・サッポロビール、一橋大学・東京経済大学、富岡製糸場、日本赤十字社、日本郵船、新日本製鉄、東洋紡績、清水建設、東京電力、東京ガス、東京海上日動火災、秩父セメントなど500社余り。さらに現在の日本の鉄道網の基礎となった多くの私鉄事業者の設立にも関わっている。

他に、日米の平和のためにも尽くし、二度もノーベル平和賞の候補になっている。また、紙幣の肖像の候補者としてこれまで数回挙げられている。

新紙幣の裏面は、東京駅丸の内駅舎になる模様で、これまた深谷市とは縁が深い。渋沢栄一が深谷に明治 21（1888）年日本煉瓦製造株式会社を設立してレンガ製造を始め、そこで製造されたレンガがその時代に建設が始まった東京駅に使われた。

1996年リニューアルされた深谷駅の駅舎は、東京駅と見間違えるほどの外観をしている。なぜなのか。市の担当者によると、「東京駅は1990年前後に赤レンガ駅舎を取り壊して高層ビルに建て替える構想が浮上していた。当時の市長が深谷にゆかりのある東京駅赤レンガ駅舎がなくなるのは忍びないといった理由から、深谷駅を東京駅にそっくりなデザインに建て替えることにした」

その後東京駅の高層化計画は自然消滅して2012年に開業当時の赤レンガ姿へと戻った。赤レンガ駅舎として甦った東京駅、そして東京駅の消滅を危惧して生み出された深谷駅。両者はいわば兄弟のような関係にあると言われている。



深谷駅舎リニューアル時に、市は駅前広場に渋沢栄一の銅像を建立。同時期に渋沢を顕彰する渋沢記念館を設立。このように深谷市と渋沢栄一の関係は非常に深い。

早速、生家や記念館などのゆかりの施設には見学者が急増しているようで、市では、新札が発行される5年後を目指して、関連施設の充実やPRに全力を挙げる考えを示している。

それにしても、新札発行はまだ5年後の話。5年後だったら、いっそ「10万円札」にしてはどうだろうか。

(2019/04/20)